

夢をはぐくむ人生は最高

坂中英徳

老いて夢が膨らむ人生をエンジョイしている

70近くになっても大きな夢を持って生きている。日本の新しい国づくりである。日本型移民国家の構想を打ち立て、その実現に努めている。移民国家ビジョンも私の夢の産物である。夢を抱くのは若者の特権というきまりはない。今わたしは老いて夢が膨らむ人生をエンジョイしている。天衣無縫に移民政策論を語っている。政策三昧の醍醐味を味わっている。

もともと移民国家のアイディアは坂中英徳の頭に浮かんだ小さな夢にすぎないものだった。ところが、歴史の必然なのか、運命のいたずらなのか、日本の命運が私の夢がかんうかどうかにかかることになった。夢のままで終わらすわけにはいかなかった。多数の人たちと夢を分かち合い、それを正夢にしなければならない。そう、移民国家構想の具体化は私の天職となった。いや、それは日本が目ざすべき国家目標となった。

夢の実現に向かって不退転の決意で臨む。ひとつの夢の実現はさらなる夢への通過点にすぎない。夢に限りはない。死を迎える日まで夢を追う。わたしの人生と引きかえに日本の窮地を救う夢が実現すれば本望である。

夢を追って精進すれば、いつかそれが正夢になる日が来る。大きな夢を描けば大きな花が咲く。夢をはぐくむ人生は最高である。年をとるにつれて夢が成長してゆく私は至福の人生を送っているのだろう。

いま現在、わたしが抱いている一番の夢は、移民国家の創建の夢を共有して行動を共にする闘士がどんどん増えることである。

天職に従事する運命に感謝する

役人を辞めた後の移民政策研究の10年を振り返ると、私の立てた移民国家構想が完全に無視される逆境の時代が続き、なにもかもほうり投げたい気持ちにかられる時があった。一方、人口崩壊危機の日本を救う移民国家の旗を振り続けなければならないという使命感に駆り立てられる時があった。そんな心の葛藤の日々が続いた。

しかし、2013年の春、突如、人生を達観できるようになった。歴史的な仕事にめぐりあった幸運をつかみ、世界のモデルとなる移民国家像を創作することが、私に課せられた使命であると悟った。

現在は、移民国家の設計者の天職を授かった運命に感謝し、移民国家の理論的基礎を固めるべくまい進している。天命を知り、天職に従事し、運命に従って生きること、これ以

上の幸せはないと思っている。

日本が「移民鎖国の国」から「移民開国の国」へと大転換すれば、日本民族の消滅の危機を乗り越えられると確信する。それだけでない。もてなしの心ですべての民族を等しく処遇する日本人なら、世界の諸民族が一つになる理想郷を築けると想像をたくましくする。

移民政策に共鳴する若者が出てきた

日本の若者を奮い立たせる国家目標はあるのか。人口崩壊時代にぴったりの目標がある。移民国家の創成だ。

日本の未来を担う若者が移民と手を携えて人類未踏の多民族共生国家の創建に挑戦するのだ。これ以上に若者のチャレンジ精神をかり立てるものはない。のみならずそれは若者が自分たちの新しい人生を切り開くことにもつながる。

わたしは法務省を退職した2005年以降、日本と世界の若者をひきつける国家ビジョンを示したいとの思いから、日本独自の移民国家構想を練ってきた。ここに打ちたてた未来構想が、超少子化と超高齢化の人口問題に対処するため、教育重視の移民政策に基づき50年間で移民1000万人を受け入れるというものだ。

この構想が実現すると、若年層が中心の1000万人の移民が税金、社会保険料を負担してくれるから、若い世代の経済的負担が軽減されるはずだ。

人口ピラミッドがひっくり返る時代を生きる20代・30代にとって移民は同士だ。移民と力を合わせて人口崩壊の危機を乗り越えてほしい。

最近、私のところに訪ねてくる20代の若者がとみに増えたと実感する。みなさん私の論文を読んで移民政策に共鳴して来られる。自分たちの責任で世界に開かれた日本を創らなければ日本の明日はないと考えている。

若い世代は自分たちの生きる道を必死で探しているように感じる。若者の話を聞いて、日本の将来は心配ないとの安心感がこみあげてきた。

タブーとの闘いに終止符を打ちたい

35年の入管時代を振り返ると、人のやらないことばかりやってきたように思う。在日韓国・朝鮮人問題にはじまり、北朝鮮帰国者問題、興行入国者問題などの難題と格闘してきた。まさに「入管戦記」の時代を駆け抜けた。異端者・無鉄砲・型破りの役人であった。

入管退職後も懲りずに移民国家の創建に挑戦している。これは1000年以上続く移民鎖国という日本最大のタブーとの闘いである。

だれもが恐れをいだいてさわろうとしない課題に真っ向から勝負を挑んでよかったと思うことがある。私の独壇場であったから、自作自演で心のままに演ずることができた。白紙に好きな絵を好きなように描けた。

決していいことばかりだったというわけではない。問題の解決に当たって世論の支持を得ることができなかった。問題を発見し、解決策としての政策論文を書き、立法など政策の実現に努めたが、国民は外国人問題や移民政策には無関心であった。逆に、一部の人々から猛烈な反発や攻撃を受けた。昔は冷酷な官僚と罵倒された。今は売国奴とののしられている。

どれもが一筋縄ではいかないものであったので、問題の解決までに気の遠くなるような年月がかかった。北朝鮮にいる日本人妻および北朝鮮残留邦人の救出は、半世紀以上の時を経てようやく解決の糸口が見えてきた。移民国家の建設については、人口崩壊の危機という有史以来の国家的危機が迫り、ようやく移民鎖国の禁忌が破られ、いま国民的議論が始まったばかりである。

わたしはこれから何をなすべきか。ライフワークに全力で取り組む。北朝鮮で助けを待っている高齢の日本人妻らの帰国問題と、日本の生存がかかる移民立国の問題に決着をつけたい。そしてタブーとの闘いに終止符を打ちたい。

歴史を動かす時がきたらちゃんと舞ってみせる

人口秩序の崩壊という国難に沈黙を決め込む日本人が大勢を占める平成時代にひとりわたしは、「人口崩壊には移民革命で」と声を上げた。国民が一丸となって移民革命を行う以外に日本再生の道はないと国民に訴えている。

「人には逃げてはならない状況がある。そのとき、ちゃんと舞ってみせることが必要だ。責任を果たす覚悟と能力がいる。」（『梅棹忠夫 語る』（日経プレミアシリーズ、2010年））

梅棹忠夫先生が最後の著書で述べられた箴言である。多民族国家の実現を目指しているわたしは、先生の平成の日本人への遺言を行動の指針としている。

「未知なるものへのあこがれ」の夢をいだいて一途の道を歩まれた人類学の泰斗は、いま私が行っている「人類共同体社会」の創造への挑戦を天国で温かく見守っておられるにちがいない。

正直、日本の未来に対する責任を放棄したい気持ちになることもあるが、梅棹先生が御存命であられたなら「あきらめたらあかん。責任を果たせ」と一喝されるであろう。

今の私に求められるのは、逃げてはならない状況に置かれていることを肝に銘じ、歴史を動かす時がきたらちゃんと舞ってみせることだ。

平和を願う心はあまねく人類のDNAに備わっている

私の親友に敬虔なイスラム教徒がいる。27年前に難民として日本に来たパキスタン人である。いま、東日本大震災の被災地に家族ともども移住し、支援活動に熱心に取り組ん

でいる。彼は多数の被災者の尊敬を集めている。

そのパキスタン人は私の移民革命思想の信奉者である。2013年2月、彼を激励するため宮城県の被災地を訪れた際に、彼は「人類共同体思想の世界史的意義」を強調し、それは「アニミズムの世界観が根底にある坂中さんのユニークな発想のたまものである」と指摘した。そのうえで、次のように予言した。

〈坂中さんの人類共同体構想は世界平和に貢献する。神の加護があるので近未来の地球社会で人類共同体社会が実現している。坂中さんは世界の救世主になる。〉

信仰心の厚いイスラム教徒が真剣な顔で「坂中英徳は世界の救世主」と熱弁を振るうのを聞いてびっくりした。異国の神の助けがあって百年後には坂中構想が具体化しており、世界平和が現実のものになっているという。

在日パキスタン人の予言が適中するかどうかはわからないが、平和を願う心はあまねく人類のDNAにそなわっていることは確かである。

人類共同体の夢を追い求める

日本の崩壊につながりかねない人口危機に沈黙を決めこむ日本人が大勢の平成の時代にわたしは、「人口危機に移民革命で立ち向かおう」と国民に呼びかけている。そこまで言い切ったわたしには、ひとりで天下を動かす気概と智恵が求められるのだろう。

しかし、移民革命思想に殉ずる覚悟はあるが、革命を行う能力も器量もないことは自分がいちばんよく知っている。自分の能力の千倍の能力が必要な大業に挑んでいることは百も承知だ。

わたしのような移民政策一本槍の器量のない人間が日本革命を成功に導くことができるのだろうか。日本の未来を決定する責任の重さに耐えて、将来の日本国民に幸福をもたらすことができるのだろうか。

だが、人口秩序の崩壊ひいては日本の崩壊が視界に入ったこの期に及んで、そんなわたくしごとにかまってはられない。ほろびゆく日本を救うため、命を捨てる覚悟で夢の実現に向かって突き進む。究極の目標は人類共同体社会を日本に創建することである。

100年後の地球社会に生きる人々から、「100年前の日本に地球共同体の夢を語った日本人がいた」といわれる時代を夢見て、無謀な試みと人から笑われようとも、夢を追い求める。